

リトアニア語とロシア語の分詞の時間表現

ーバルト・スラヴ語の比較対照論的観点からー*

櫻井 映子*

Tense and Aspect of Participles in Lithuanian and Russian: Towards a Comparative-Contrastive Study of Baltic and Slavic Languages

SAKURAI Eiko*

Abstract

The aim of the present paper is to develop a contrastive analysis of tense and aspect of participles - morphological adjective participles and indeclinable adverbial participles (or gerund) - in Lithuanian and Russian, concentrating specifically on their semantic and functional interpretation.

We saw that the participial systems of Lithuanian and Russian are typologically similar in possessing four basic types, so-called present and past active and passive participles. However, the temporal expressions of these participles in Lithuanian and Russian are considerably different. In Russian there is a clear tendency to align the tense with aspect - past with perfective, present with imperfective, and the formation and usage of participles are more restricted than in Lithuanian. On the other hand, in Lithuanian participles are generally formed without an aspectual restriction and play a greater role in tense-aspect system of this language. The comparison with Russian allows us to expose the multiple meanings and functions of Lithuanian participles even more clearly than it would appear if Lithuanian was viewed by itself.

In diachronic perspectives, Slavic languages have developed verbal aspect, which are more systematic (grammaticalized) than Baltic. It might be presumed that the developmental tendencies of verbal aspect have close relation to the reduction of functional load of the tense forms of participles.

1. はじめに

印欧語族の中でもバルト語派¹⁾とスラヴ語派²⁾の間には共通点・類似点が多く、これらの系統関係の問題(「バルト・スラヴ語共通祖語問題」)は、印欧歴史比較言語学の主要な課題の1つであった。ゆえに、祖語の姿を明らかにすることを目的として、諸言語に共通する語彙・文法素の形式的体系を比較する通時的研究がとくに充実している。

だがその一方で、共時的研究にはいまだ課題が多く、とりわけ、各文法素の意味や機能における類似と差異に関する対照言語学的研究はこれまで重視されてこなかった。

本稿では、バルト語派からはリトアニア語、スラヴ語派からはロシア語を取り上げ、これらの言語の分詞³⁾の時間表現について考察する。本稿の目的は、2つの言語の分詞のアスペクトとテンスを比較対照し、それぞれの言語を個別に観察するだけでは見失

*日本学術振興会特別研究員

われがちな機能意味論的特徴を浮き彫りにすることにある。なお、本稿における考察はリトアニア語の分詞により比重をおくが、標題を簡潔にするためにこの点を表さなかった。

リトアニア語とロシア語の分詞は、性・数・格を区別する形容詞的分詞（一般的な名称によれば「分詞 *participle* / 形動詞 (*dalyvis / pričastie*)」)と不変化の副詞的分詞（「副分詞 *gerund* / 副動詞 (*padalyvis / deepričastie*)」)に大別される。まず形容詞的分詞に関しては、現在および過去の能動および受動分詞の4つを揃えている点で、これら2つの言語は共通している。また副詞的分詞はいずれの言語においても能動態のみで受動態をもたない。リトアニア語の分詞はテンスの点でロシア語よりも豊富であり、後者にはない習慣過去分詞、未来分詞が見られるが、その使用は比較的稀であるので、本稿ではいずれの言語にも存在する現在分詞および過去分詞に考察の対象を絞ることにする。

2. 分詞の基本的な統語論的特徴

分詞の主な統語論的機能は、①定語的 *attributive* 機能、②半述語的 *semi-predicative* 一状況語的機能⁴⁾、③述語的 *predicative* 機能の3つである。分詞の形式とこれらの統語論的機能の関係は、バルトおよびスラヴ語派においては言語によって様々な相違が見られるが、リトアニア語とロシア語は主に次のような点で異なる。(以下、過去分詞の例を示す。)

①定語的機能をもつ分詞は、結合する名詞の性・数・格に一致する。リトアニア語の形容詞的分詞の限定形(3人称代名詞形

を付加して形成)は、文字通り名詞を限定・特定するために用いられる(例、単純(非限定)形 *perskaitęs* 「読み終えた」に対する限定形 *perskaitęs usysis* 「(その)読み終えた」)。それに対して、ロシア語の分詞のいわゆる長語尾形は、定語的機能に特化されている。ロシア語の能動分詞はこの長語尾形のみをもつ。

(1) Lith. draugas, *perskaitęs* knyga

友人(男単主)読み終えた

(過能形分・男単主)本(女単対)

Russ. drug, *pročitavšij* knigu

友人(男単主)読み終えた

(過能形分・長・男単主)本(女単対)

本を読み終えた友人

(Eng. friend who *has read* the book)

(2) Lith. *perskaityta* knyga.

読み終えられた(過受形分・女単主)

本(女単主)

Russ. *pročitannaja* kniga

読み終えられた(過受形分・長・女単主)本(女単主)

本(女単主)

読み終えられた(すでに読んである)本

(Eng. book which *has been read*)

②状況語的機能をもつ場合、リトアニア語の形容詞的分詞は、述語の主動詞と同一の主語(主格)をもち(以下、SS用法(*same-subject use*)と呼ぶ)、この主語に対して形態論的な一致を示す。形容詞的分詞のうち、唯一、現在能動分詞は状況語的機能(SS用法)をもたないが、半分詞(性・数を区別するが格変化はもたない)と呼ばれるこの機能専用の分詞がこれに代わって用いられる(例、*skaitydamas* 「読みながら」)。一方、不変化の副詞的分詞は、主動詞と同一の主語

をもたず（以下、DS用法（different-subject use）と呼ぶ）、意味上の主語を与格で示す。それに対して、ロシア語はDS用法のための特別な分詞形をもたない。ロシア語の副詞的分詞はSS用法の専用の形式である。

(3) Lith. *Perskaitęs* knyga,

読み終えて（過能形分・男単主）本（対）

Jis išėjo pasivaikščioti.

彼（主）散歩に出かけた（動・一過3単）

Russ. *Pročitav* knigu, on

読み終えて（過副分）本（対） 彼（主）

pošel guljat'.

散歩に出かけた（動・過男単）

本を読み終えて、彼は散歩に出かけた。

(Eng. *Having read the book, he went for a walk.*)

(4) Lith. *Man perskaičius* knyga,

私（与）読み終えると（過副分）本（対）

Jis tuojau atėjo jos pasiskolinti.

彼（主）すぐにそれを借りに来た（動・一過3単）

私が本を読み終えると、彼はすぐにそれを借りに来た。

(Eng. *After I have read the book, he soon came to borrow it.*)

- ③リトアニア語では、能動分詞・受動分詞のいずれも述語的機能をもち、be動詞と結合して分析的な形式を形成する⁵⁾。ロシア語では基本的に、能動分詞は述語的機能をもたず、受動分詞の短語尾形のみが述語的機能をもつ⁶⁾。なお、現在テンスにおいては、ロシア語ではbe動詞は現れず、リトアニア語でも3人称形は稀にしか現れない。

(5) Lith. *Jis [yra] perskaitęs* knyga.

彼（主）読み終えている（[be動・現3単]+

過能形分・男単主）本（対）

彼はその本を読み終えている。

(Eng. *He has read the book.*)

(6) Lith. *Knyga [yra] perskaityta.*

本（主）読み終えられている（[be動・現3単]+過受形分・女単主）

Russ. *Kniga pročítana.*

本（主）読み終えられている（過受形分・短・女単）

その本は読み終えられている（すでに読んである）。

(Eng. *The book has been read.*)

このように、リトアニア語とロシア語の分詞の基本的な統語論的機能と形式の関係は、定語的機能においてはある程度共通するものの、状況語的機能および述語的機能においては異なることが多い。通時的な観点からすれば、バルト・スラヴ語では、定語的機能をもつ分詞と述語的機能をもつ分詞の間の形式的な差異化、特定の形式に対する状況語的機能の固定化といった、統語論的機能を反映した形式的な分化のプロセスが観察される。このような傾向は、リトアニア語よりもロシア語においてより明確に現れていると言えよう。

リトアニア語でもロシア語でも分詞はその形態・機能において動詞と形容詞および副詞としての特徴をあわせもっている。いずれの言語の規範文法においても分詞はテンスおよびヴォイスのカテゴリーを動詞と共有すると説明されているが、たとえば、過去能動分詞、現在受動分詞、といった分詞形が、それぞれの形態に従ってテンス的・ヴォイス的区別を表示する機能をもっているかと言えば、実際は必ずしもそうではない。また、アスペクトについても同様

表1 リトアニア語の分詞の基本的な統語論的機能

		能動分詞	受動分詞
定語的機能		形容詞的分詞 (限定形派生可能)	形容詞的分詞 (限定形派生可能)
半述語的・ 状況語的機能	SS用法	形容詞的分詞	形容詞的分詞
	DS用法	副詞的分詞	—
述語的機能		形容詞的分詞	形容詞的分詞

表2 ロシア語の分詞の基本的な統語論的機能⁷⁾

		能動分詞	受動分詞
定語的機能		形容詞的分詞長語尾形	形容詞的分詞長語尾形
半述語的・ 状況語的機能	SS用法	副詞的分詞	—
	DS用法	—	
述語的機能		—	形容詞的分詞短語尾形

のことが言える。アスペクト的な接辞を付加されていても、分詞は定形動詞のように明確なアスペクト対立を表すものではない。

分詞のアスペクト的・テンス的区別は、定語的機能をもつ場合にはより曖昧であり⁸⁾、述語的機能をもつ場合にはより明確に示される。リトアニア語では、現在・過去の能動・受動分詞という4タイプの基本的な分詞形が、基本的に、定語的機能のみならず、半述語的および述語的機能をもっており、この言語の時間表現においてきわめて重要な役割を担っている。それに対し、ロシア語では、基本的に、状況語的機能をもつのは能動分詞のみ、述語的機能をもつのは受動分詞のみであり、分詞の時間表現はより制限されている。

3. 動詞アスペクトにおける相違

ここで、リトアニア語の動詞アスペクトの特徴について触れておきたい。「アスペクト」という術語は、狭義に文法的・形態論的手段を指すこともあれば、研究者によっては広義に観念的・機能意味論的カテゴリー（他の用語で「アスペクト性」として用

いられることもある。本稿では後者の立場を取り、perfective aspect（完結相）を「ひとまとまりの、単一の全体としての場面の捉え方」、imperfective aspect（不完結相）を「内的時間構成をはっきりさせる、部分としての場面の捉え方」と規定する。一方、スラヴ語において典型的に現れる、動詞の対によって表現される狭義のアスペクトを、伝統に従い「動詞アスペクト」（「完了体動詞」「不完了体動詞」と呼んで区別する。なお、パーフェクト perfect は、上の perfective とは区別される。パーフェクトの本質は、様々な印欧諸語のパーフェクト形（いわゆる完了時制形）に見られるように、先行する perfective 場面と、その結果として生じる imperfective 場面（結果・効力の状態）の関係づけにある。

リトアニア語では、ロシア語のように、アスペクト表示機能をもつ接頭辞・接尾辞を用いた動詞アスペクトの体系の発達が見られるが、筆者が過去の論文（櫻井1997、1999、2002、2003）において示してきたように、両者には注目すべき重要な相違がある。

まず、ロシア語とは異なり、リトアニア

語のAspect表示機能をもつ接頭辞（とくに *pa-*）は、かならずしも動詞の意味に完了性・完成性を与えるわけではなく、通常は動詞に語彙の変更をもたらす。また、そのような有接頭辞動詞から、反復性・持続性を表わす動詞を派生させる接尾辞（とくに *-inē-*）もそれほど生産的ではなく、Aspect的な対をなさないいわゆる双Aspect動詞も多い。リトアニア語では、概して、Aspect的な接頭辞や接尾辞の付加は、動詞の語彙的（辞書的）意味をも変更し、一定の意味特徴を共有する派生動詞の（いわゆる *aktionsart*）グループを形成する。リトアニア語で *perfective* : *imperfective*（以下、*pfv.* : *ipfv.* と略す）対と従来見なされている動詞の対の多くは、限界の：非限界の *telic* : *atelic* (*bounded* : *nonbounded*)⁹⁾ 対と呼ぶべきものである。

つまり、ロシア語では、動詞は基本的にAspect的な対（いわゆる完了体動詞・不完了体動詞の対）をなして現れ、これが一般Aspect論の規定する *pfv.* : *ipfv.* の意味をほぼ充足していると考えられる。それに対し、全体的な二項対立をなさないリトアニア語の動詞Aspectは、ロシア語のそれと比べれば文法化の程度が低く、語彙部門と文法部門の間にあるカテゴリーとして位置づけられるものである。

このような動詞Aspectにおける機能意味論的相違は、バルト・スラヴ語全体を通じて観察される。対立の体系化の発達度からすれば、おそらく、古プロシア語、ラトヴィア語はリトアニア語の前に置かれ、他のスラヴ語は、古代教会スラヴ語、ソルブ語、南スラヴ語、ソルブ語以外の北スラヴ語の順に、リトアニア語とロシア語の間

に置かれるであろうが、全体としてはバルト語の動詞Aspectはより語彙的であり、スラヴ語の動詞Aspectはより文法的である。分詞の時間表現も、この動詞Aspectの内容との関連から捉えるべきであろう。

4. 分詞の時間表現に関する問題

Musteikis (1972) を始めとする従来のリトアニア語とロシア語の対照研究においては、上に示したような動詞Aspectにおける相違が十分に認識されていなかった。Musteikis (1972) は「いずれの言語においても、分詞は形式的に表されたAspect・テンス・ヴォイスという動詞的カテゴリーを有しているが、これらのカテゴリーは分詞においては動詞とは異なった現れ方をする。文法的なAspectのカテゴリーは、動詞と異なった独自の表現形式をもたず、動詞からそのまま引きつがれる」と述べているが、分詞の時間表現における2つの言語の機能意味論的な相違には言及していない。

一方、バルト・スラヴ語の比較言語学的観点を導入した研究としては、たとえば Ambrazas (1990) は、分詞のAspectについて、「*pfv.* 意味は過去分詞、*ipfv.* 意味は現在分詞に特徴的である」と指摘しており、形態と意味の関係をより注意深く扱っている。Ambrazas (1990) と同様に形態のみならず意味の観点から分詞のAspectを説明したものとしては、さらに、Hewson & Bubenik (1997) が挙げられるが、前者がバルト・スラヴ語研究の伝統に従ってAspect・カテゴリーを動詞の対にのみ見ているのに対し、後者は一般Aspect論の

視点からアスペクトの概念を広義に捉えた上で、基本的な4タイプの分詞を(7)のように再解釈している(括弧内の伝統的名称は筆者による)。

- (7) Perfective 'worked' (過能分)
 Imperfective 'working' (現能分)
 Potential 'workable, worked' (現受分)
 Retrospective 'having been worked' (過受分)

分詞は意味論的にはテンス・ヴォイスの区別をもたず、アスペクトのみを表すという、このHewson & Bubenik (1997)の現代的解釈は注目に値するが、従来用いられてきた術語「パーフェクトperfect」に相当すると思われる「回顧相Retrospective」として過去受動分詞のみを想定し、過去能動分詞については「完結相Perfective」と規定している点には疑問が残る。たとえば、先に挙げた例(1)～(6)において、リトアニア語・ロシア語いずれの過去能動分詞も、パーフェクトperfect分詞とみなすべきものと思われる。

このような従来解釈に共通する問題点は、分詞のアスペクト、テンス、および、これらと密接に関係するヴォイスのカテゴリーが、形態・意味・機能の観点から総合的に捉えられてこなかったことであろう。そこで本稿では、この点に的を絞って、リトアニア語とロシア語の分詞の時間表現についての考察を進めることにする。

5. 分詞の形成上のアスペクト的制約

Hewson & Bubenik (1997)のように、分詞をそのアスペクトに基づいて再解釈するという方法は、動詞アスペクトとの区別が不明確になるという側面があり、用語上

の混乱を引き起こすおそれがある。

たとえば、パーフェクト分詞という名称は、ロシア語の過去分詞に関しては、大きな問題なく受け入れられよう。ロシア語では、副詞的分詞のうち、過去分詞は専ら完了体動詞(pfv.動詞)からのみ形成され、現在分詞も通常は不完了体動詞(ipfv.動詞)から形成される。完了体動詞から形成された副詞的現在分詞の使用はきわめて制限されている上、その場合は概して過去分詞に相当する意味・機能をもつ。また、形容詞的分詞においては、現在分詞は完了体動詞からは形成されない(過去分詞はより稀ではあるが不完了体動詞からも形成される)。つまり、ロシア語の分詞においては、形成上のアスペクト的制約がより厳しく、アスペクトがテンスに優越しつつあるように見受けられる。

それに対して、リトアニア語では、原則としてどの分詞形もアスペクト的制約なしに形成され、分詞の時間表現は、アスペクトとテンスの相関性において成立する。ゆえに、リトアニア語の過去分詞に対してパーフェクト分詞という名称を適用する際には、純粹にアスペクト的なカテゴリーであるpfv.と、テンス的要素も含むパーフェクトperfectの区別を明確にし、上述のような動詞アスペクトの特徴をふまえた上でなければならない。このような事情により、本稿では、慣例に従って過去分詞・現在分詞という伝統的名称を用い、混乱を避けることにする。

リトアニア語とロシア語の形容詞的分詞の基本的な体系は、以下のようにまとめられる。(例、動詞「読む」から形成された形容詞的分詞の男性単数主格形)

表3 リトアニア語の形容詞的分詞
(skaityti / perskaityti 「読む」)

ヴォイス テンス	能動	受動
現在	skaitas perskaitas	skaitomas perskaitomas
過去	skaitęs perskaitęs	skaitytas perskaitytas

表4 ロシア語の形容詞的分詞
(čitat' / pročitat' 「読む」)

ヴォイス テンス	能動	受動
現在	čitajuščij	čitaemyj
過去	čitavšij pročitavšij	čitannyj pročitannyj

また、状況語的機能をもつリトアニア語の副詞的分詞 (DS用法) とロシア語の副詞的分詞 (SS用法) は、以下のように対照される。(例、動詞「読む」から形成された副詞的分詞)

表5 リトアニア語の副詞的分詞

ヴォイス テンス	能動
現在	skaitant perskaitant
過去	skaičius perskaičius

表6 ロシア語の副詞的分詞

ヴォイス テンス	能動
現在	čitaja (——) 10)
過去	—— pročitav

このようなリトアニア語とロシア語の実態は、バルト・スラヴ語の分詞の共時的分布においてはいかに位置づけられるもので

あろうか。バルト・スラヴ語における分詞のアスペクトとテンスの関係については、現在分詞はipfv.動詞をベースとし、過去分詞はpfv.動詞をベースに形成されるという指摘がしばしばなされる。実際、これと比較すると、ipfv.動詞形成の過去分詞、および、pfv.動詞形成の現在分詞は、通言語的に見ても、一言語内で見ても、はるかに稀にしか用いられない。また、バルト・スラヴ語の分詞体系の目立った特徴は、印欧諸語において一般的に見られる現在能動分詞と過去受動分詞に加えて、過去能動分詞と現在受動分詞をもつことであるが¹¹⁾、とりわけ後者の使用は他の分詞と比べて稀である。だが、このような分詞の形成上の制約は、バルト語とスラヴ語では大きく異なり、またスラヴ語派内でも言語によって違いがあるように見受けられる。

まず、形容詞的分詞については、バルト語は、古プロシア語およびラトヴィア語もリトアニア語と同様に、現在・過去の能動・受動分詞という4タイプの分詞を揃えており、これらすべてがアスペクト的制約なく形成される。それに対して、スラヴ語には、ロシア語と比べて使用はより制限的であるものの、現在・過去の能動・受動の4タイプの分詞を揃えているウクライナ語のような言語もあれば、ポーランド語のように過去能動分詞と現在受動分詞を事実上欠いているもの、スロヴァキア語のように現在受動分詞を欠いているものもある。また、バルト語との際立った違いは、現代スラヴ語では、基本的に完了体動詞からは現在分詞は形成されないということである。他方、過去分詞は原則として不完了体動詞からも形成可能であるが、実際の使用においては、

完了体動詞から形成される場合が大半を占める。

一方、副詞的分詞については、若干事情が異なっている。まず、バルト語では、古プロシア語およびラトヴィア語は、現在分詞をもつが過去分詞はもたない。スラヴ語にも、スロヴァキア語やブルガリア語のように過去分詞を事実上欠くものもある。また、副詞的分詞についても、スラヴ語には概してアスペクト的な制約が見られる。たとえばポーランド語では、基本的に、現在分詞は完了体動詞からは形成されず、過去分詞は不完了体動詞からは形成されない。ブルガリア語でも、現在分詞は完了体動詞からは形成されないようである。これに対して、バルト語の副詞的分詞には、そのような形成上のアスペクト的制約は見られない。

以上の比較から分かるように、バルト語とは異なり、スラヴ語では概して分詞の形成はアスペクト的制約を受ける。だが、古い時期のスラヴ語、古代教会スラヴ語においては、そのような制約は現代語におけるほど厳しくはなく、バルト語と同様に、現在・過去の能動・受動の4タイプの分詞すべてが、完了体動詞・不完了体動詞いずれからも形成可能であったようである。このことから、分詞の形成上のアスペクト的制約と動詞アスペクトの発達との間には、密接な関係があることが推察されよう。

6. 分詞のアスペクトとテンス

まず、アスペクトの問題については、リトアニア語とロシア語の分詞のアスペクトが機能意味論的にみて「動詞から引きつぐ」ものでないことは明らかだが、Hewson

& Bubenik (1997) の解釈したように、動詞アスペクトと関わりなく分詞形それ自体によってのみ表されるものとも言えないであろう。また、テンスについては、しばしば指摘されるように、定形動詞のテンスとは異なり、分詞のテンスは事象の生起時点と発話時点の間の直示的關係を表さない。すなわち、定形動詞の表す絶対的時間に対して、分詞は相対的時間を指し示す機能をもつのである¹²⁾。

本稿では、現在分詞と過去分詞という基本的な分詞形は、次のような時間的意味・機能をもつと考える。まず、現在分詞は、インパーフェクト分詞であり、事象の開始限界も終了限界も含まない中間の局面を限定し（限界間づけ）、相対的時間〈同時性〉を表す。一方、過去分詞は、パーフェクト分詞であって、事象の開始、終了、あるいはその両方の限界的な局面、および、それに続く結果・効力の状態の局面を限定し（限界づけ）、相対的時間〈先行性+同時性〉を表す。

上の解釈では、分詞の現在と過去という基本的な2つのテンスは、事象が明確に限界づけられたものかどうか、という区別をその基礎としているが、実はこの区別は、動詞アスペクトのpfv.とipfv.の対立の基礎でもある。その意味で、動詞アスペクトと分詞のテンスには、事象の示し方において共通性がある。それがpfv.アスペクトを過去分詞に、ipfv.アスペクトを現在分詞に結びつける要因である。おそらく、ロシア語では、分詞の時間表現がアスペクトによって統一され、テンスの機能負担量が減少しつつあると思われるのに対して、動詞アスペクトがロシア語ほど発達していないリトアニア語

では、分詞のテンスがより重要な機能を担っていることが予想されよう。

たとえば、先に示した例 (1) ~ (6) の過去分詞は、リトアニア語では限界動詞 *perskaityti*、ロシア語では完了体動詞 *pročitat'* から形成されている。これらの過去分詞を、それぞれ、非限界動詞 *skaityti*、不完了体動詞 *čitav'* から形成された分詞に置き換えてみると、次のようになる¹³⁾。

- (8) Lith. *draugas, skaitęs knygą*
 Russ. *drug, čitavšij knigu*
 (過能形分)

本を読んでいた友人

- (9) Lith. *skaityta knygą*
 Russ. *čitannaja kniga*
 (過受形分)

読まれていた (読まれたことのある) 本

- (10) Lith. *Valandą skaitęs knygą,*
 1時間 読んで (過能形分) 本を
jis išėjo pasivaikščioti.
 彼は散歩に出かけた

本を1時間読んでから (Russ. **čitav'*)、彼は散歩に出かけた。

- (11) Lith. *Jis [yra] skaitęs tą knygą.*
 ([be動・現]+過能形分)

彼はその本を読んだことがある。

- (12) Lith. *Knyga [yra] skaityta.*
 ([be動・現]+過受形分)

その本は読まれている (読まれたことがある) (Russ. **čitana*¹⁴⁾)。

(10) のような例において、ロシア語では、不完了体動詞 *čitav'* からは副詞的過去分詞が形成されない。また、(12) のような例において、不完了体動詞から形成された形容詞的分詞の過去受動分詞は、原則として

述語的には用いられない。それに対して、リトアニア語ではすべての場合に非限界動詞形成の過去分詞に置換可能である。非限界動詞から形成された過去分詞は、ある場面が少なくとも一定の時間続いたこと、あるいは少なくとも一度は生起したことを示す。

以下に、現在分詞の例を挙げる。

- (13) Lith. *draugas, skaitantis/perskaitantis*

Russ. *drug, čitajuščij/*pročitajuščij*
 友人 読んでいる (現能形分)
knygą
knigu

本を

本を読んでいる / 読み終わられる (読み終わることができる) 友人

- (14) Lith. *skaitoma!/?perskaitoma*¹⁵⁾ *knygą*

Russ. *čitaemaja!/*pročitaemaja kniga*
 読まれている (現受形分) 本

読まれている / 読み終わられる本

- (15) Lith. *Skaitydamas!/?perskaitydamas*
 読みながら (半分 (現能形分))

knygą, jis išėjo pasivaikščioti.

本を 彼は散歩に出かけた

Russ. *Čitaja!/*pročitaja knigu,*

読みながら (副現分) 本を

on pošel guljat'.

彼は散歩に出かけた

本を読みながら / 読み終わつつ、彼は散歩に出かけた。

- (16) Lith. *Jis buvo beskaitęs/ beperskaitęs*¹⁶⁾

彼はすでに読んでいた (be動・一過+現能

knygą, kai aš atėjau.

形分) 本を 私が来たとき

私がやって来たとき、彼はすでにその本を読んでいた / 読み終わるとこ

ろだった。

(17) Lith. *Knyga [yra] skaitoma / ?perskaitoma.*

本は 読まれている (be動・現+現受形分)

Russ. *Kniga ??čitaema / *pročitaema.*

本は 読まれている (現受形分)

その本は読まれている / 読み終わら
れる。

以上の例が示すように、ロシア語では、現在分詞は概して完了体動詞からは形成されない。リトアニア語でも、限界動詞から形成された現在分詞の使用は、最小のコンテキストにおいては不自然となることがあるが、非文法的とはならない。概して、限界動詞から形成された現在分詞は、ある事象が完成する可能性があること、その準備、計画、あるいは試みの局面にあることを表す。このように形成上のアスペクト的制約が少ないことによって、リトアニア語の分詞においては、きわめて簡潔で多様な時間表現が可能になっている。

7. ヴォイスとの相関性

ここでは、ヴォイスを、動詞の表す動作と、その動作を起こす動作主、および、その動作を受ける受動者の間の意味関係として広義に捉え、2つの言語における分詞の時間表現とヴォイスの関係について考察することにする。

ヴォイスによって表される文法的意味の観点からすれば、典型的には、能動態は、ある動作が主語subject (=動作主agent) の意志のもとに発生し、対象object (=受動者patient) に何らかの影響をもたらすことを示す。他方、受動態は、動作が主語 (=受動者) の意志によらず、他の要素 (動作主) によっておこなわれ、それが主語に何

らかの影響をもたらすことを示す。このように、能動・受動の対立が、主語と動作主が同一である能動文、主語と受動者が同一である受動文に典型的に現れ、主語という文法カテゴリーに言及することなく定義することができないものとするれば、分詞形自体は厳密な意味において能動・受動の区別をもたない。とくに定語的機能をもつ分詞において、ヴォイスの対立は、主語を明示する対格言語としての文法関係の確立を前提としない原初的な段階、いわば純粋な意味の対立として現れる。

過去分詞 (パーフェクト分詞)

まず、過去受動分詞は、典型的には、ある先行する動作の結果・効力の状態が、受動者の領域に属していることを示す、明確なパーフェクト分詞である。

(18) Lith. *atidarytas langas*

Russ. *otkrytoe okno*

(過受形分)

開けられた窓

(19) Lith. *parašytas laiškas*

Russ. *napisannoe pis'mo*

(過受形分)

書かれた手紙

(20) Lith. *pastatytas namas*

Russ. *postroennyj dom*

(過受形分)

建築された建物

この分詞が受動態の形成において果たしている役割の中に、印欧諸語に広く観察されるパーフェクトと受動態の間の密接な関係を見出すことができよう。パーフェクト特有の時間的な意味・機能によって、過去受動分詞は、受動態という付帯的な意味をも

獲得している。リトアニア語・ロシア語いずれにおいても、この分詞は、be動詞をともなって、主語である受動者の状態を表す、状態パーフェクト受動statal perfect passive（別の用語で、客体的結果相objective resultative）を形成するのに用いられる。これは、リトアニア語とロシア語の分詞の時間表現における、最も明確な接点と言えよう。

(21) Lith. Langas nuo ryto bus *atidarytas*.

Russ. Okno s utra bydet *otkryto*.

(be動・未+過受形分)

窓は朝から開けてあるだろう。

(22) Lith. Ten seniai [yra] *pastatytas* namas.

([be動・現]+過受形分)

Russ. Tam davno *postroen* dom.

(過受形分)

あそこにはずっと前から建物が建ててある。

過去受動分詞のこの状態の意味は、現在、過去、あるいは未来であり得るbe動詞のテンスに関係なく（ただしロシアではbe動詞の現在形は現れない）、先行する動作の結果としての局面にあるものとして、主語を指し示す。その動作は主語とは独立した他の要素によってもたらされるので、この表現は根本的に受動である。

それに対して、同じくパーフェクト分詞である過去能動分詞は、典型的には、先行する動作の結果・効力の状態が動作主の領域に属していることを示す。

(23) Lith. *užšalęs* langas

Russ. *zamjorzšee* okno

(過能形分)

凍りついた窓

(24) Lith. *nukritę* lapai

Russ. *opavšie* list'ja

(過能形分)

落ちた葉々

(25) Lith. *mirusi* motina

Russ. *umeršaja* mat'

(過能形分)

死んだ母親

リトアニア語では、この分詞は、be動詞をともなって、主語である動作主の状態を表す、能動の状態パーフェクトstatal perfect（別の用語で、主体的結果相subjective resultative）を形成するのに用いられる。ロシア語では、動詞の一般的なテンス形がこれに相当する機能をもつ。

(26) Lith. Langas nuo ryto bus *užšalęs*.

(be動・未+過受形分)

Russ. Okno s utra *zamjorznet*.

(動・未)

窓は朝から凍りついているだろう。

(27) Lith. Brolis jau [yra] *išvažiavęs* iš miesto.

([be動・現]+過能形分)

Russ. Brat uže *uexal'iz* goroda.

(動・過)

兄はすでに町を去っている。

この形式も、be動詞のテンスに関係なく、先行する動作の結果状態の局面にあるものとして主語を指し示すが、その動作の完成に直接関与しているのは主語であるので、この表現は根本的に能動である。

興味深いことに、リトアニア語とロシア語の過去分詞を比較対照してゆくと、ほぼ等しい意味を表すにも関わらず、前者では能動分詞、後者では受動分詞が用いられる例がみとめられる。これらの例において、

ロシア語の過去受動分詞は、先行する動作の結果状態が、受動者ではなく動作主に属していることを示すのである。この現象については、さらに動詞の語彙の意味や言語の種類の観点から検討する必要があるが、この事実によって、ロシア語の過去分詞におけるヴォイスの対立が、リトアニア語と比べて、より曖昧なものになっていることは確かである。

- (28) Lith. *išsigandęs berniukas*
(過能形分)
Russ. *ispugannyj mal'čik*
(過受形分)
驚いた (びっくりしている) 少年
- (29) Lith. *apsiverkusi sesuo*
(過能形分)
Russ. *zaplakannaja sestra*
(過受形分)
泣き疲れた妹
- (30) Lith. *Mergaitės šiltai apsirengusios.*
(過能形分)
Russ. *Devuški teplo odety.*
(過受形分)
少女たちは、暖かい服装をしている
(厚着している)。

現在分詞 (インパーフェクト分詞)

一方、現在能動分詞と現在受動分詞は、いずれもインパーフェクト分詞であり、典型的には、動作 (あるいは状態) を、単純に持続しているか、あるいは、完成に向けて進行中であるものとして指し示す。能動分詞が動作を動作主に結びつけるのに対し、受動分詞は動作を受動者に結びつける。持続中あるいは進行中の顕在的な動作を受動者との関わりから捉えるというのは、認知

の観点からすればやはり不自然なことに思われるが、概して他の分詞に比べて現在受動分詞の使用が一般的でないのはこのためであろう。

- (31) Lith. *žvilgantį sniegą*
Russ. *blestjaščij sneg*
(現能現分)
輝いている雪
- (32) Lith. *vyras, einantis gatve*
Russ. *mužčina, iduščij po ylice*
(現能現分)
道を歩いている男
- (33) Lith. *mirštanti motina*
Russ. *umirajuščaja mat'*
(現能現分)
死にかけている母親
- (34) Lith. *mylimas mokytojas*
Russ. *ljubimyj učitel'*
(現受現分)
愛されている教師
- (35) Lith. *skaitomas knygas*
Russ. *čitaemaja kniga*
(現受現分)
読まれている本
- (36) Lith. *statomas namas*
Russ. *stroimyj dom*
(現受現分)
建築されつつある建物

リトアニア語では、現在能動分詞 (接頭辞-be-を付加) は、be動詞をともなって分析的なインパーフェクトを形成する。このインパーフェクト形では、be動詞は過去形であることが最も多く、次が未来形であって、現在形は稀である。ロシア語では一般的なテンス形がこれに相当する。

- (37) Lith. Jis buvo *bemiegęs*, kai aš atėjau.
 (be動・一過+現能形分)
 Russ. On užė *spal*, kogda ja prišel.
 (動・過)
 私がやって来たときには、彼はすでに眠っていた。
- (38) Lith. Jis bus *bemiegęs*, kai aš ateisiu.
 (be動・未+現能形分)
 Russ. On užė *budet spať*, kogda ja pridjot.
 (動・未)
 私がやって来るときには、彼はすでに眠っているだろう。

リトアニア語では、現在受動分詞もまた、be動詞をともなっていいわゆるインパーフェクト受動を形成する。一方、ロシア語では現在受動分詞は概して述語的機能をもたず、いわゆる再帰動詞 (-sja) がこれに代わって用いられる。

- (39) Lith. Paroda bus *ruošijama* po metų.
 (be動・未+現受形分)
 Russ. Vystavka *budet gotovit'sja* čerez god.
 (動・未)
 1年後には展覧会は準備されつつあるだろう(準備中だろう)。
- (40) Lith. Namai buvo *statomas* ten prieš metus.
 (be動・一過+現受形分)
 Russ. Dom *stroilsja* tam god nazad.
 (動・過)
 1年前にはあそこに家が建てられつつあった(建設中だった)。

ロシア語には、再帰動詞による受動と、be動詞をともなう過去受動分詞の短語尾形による受動の表現があるが、これらの2つの方法は動詞アスペクトの違いを反映しており、前者は不完了体動詞、後者は完了体動詞に特徴的である。これに対して、リトアニア

語の再帰動詞は受動を表さない。リトアニア語では、受動的意味は、アスペクト的制約なく形成される現在および過去の受動分詞によって専ら表現される。

このように、分詞の時間表現とヴォイスとの相関性の観点から2つの言語を比較対照すると、現在・過去の能動・受動分詞という4タイプの基本的な分詞形がすべて述語的に用いられ得るリトアニア語では、ヴォイスの意味の表現においても、分詞がより重要な役割を担っていることが分かる。

8. 結び

本稿における考察の結果は、次のように纏められる。

- 1) 2つの言語の分詞の時間表現は、定語的機能において最も共通するところが多いのに対して、述語的機能における接点は過去受動分詞のみである。リトアニア語の分詞が述語的にも幅広く用いられ、テンス・アスペクト体系において重要な役割を担っているのに対して、ロシア語の分詞の時間表現はより制限されている。
- 2) 分詞の形成上のアスペクト的制約は、ロシア語ではリトアニア語よりも厳しい。バルト・スラヴ語の比較対照論的観点から見て、このような制約と動詞アスペクトの発達の間には密接な関わりがあると考えられる。
- 3) いずれの言語でも、基本的に、現在分詞はインパーフェクト分詞、過去分詞はパーフェクト分詞としての時間的意味・機能をもつが、それぞれリトアニア語ではロシア語よりも多義的・多機能的である。
- 4) 時間表現と相関するヴォイスの表現においても、リトアニア語ではロシア語より

も分詞の機能負担量が大きい。また、ロシア語では分詞におけるヴォイス的対立はより曖昧である。

類型論的には等しい分詞体系をもつリトアニア語とロシア語であるが、本稿での比較対照によって、両者には多くの機能意味論的な相違がみとめられることが浮き彫りになった。全体として見れば、分詞の時間表現の基盤となる動詞アスペクトの本質的な相違により、2つの言語では、対応する分詞形の役割分担のバランスがずれている。ロシア語では、定形動詞と同様に分詞においてもアスペクトがテンスを統一しつつあり、分詞の役割はより限られたものであるのに対し、リトアニア語では、分詞はアスペクトとテンスの相関関係においてより多様で幅広い時間表現を可能にしている。

結びとして、分詞の使用の一般性に関して触れておきたい。本稿では詳細なデータをもたないので議論を差し控えてきたが、多様なタイプのテキストを対照してみると、この点における2つの言語の相違はきわめて大きいものと思われる。ロシア語における分詞の使用は、他のスラヴ語と比較すればより一般的なようであるが、リトアニア語における文語・口語の別を問わない分詞の使用は、これをはるかに凌ぐものである。ロシア語で接続語・接続詞を含む従属節、形容詞、副詞、定形動詞等が用いられるコンテキストにおいて、リトアニア語では分詞が対応している例は、しばしばみとめられる。ロシア語の分詞体系の歴史の変遷については、本稿では詳しく論じることができなかつたが、このような語用論レベルの相違が、史的变化を通じて言語の構造にいかなる影響を及ぼすものか、さらに考察を

進める必要があるだろう。

付記

本稿で用いた例文は、基本的に筆者が作成し、ネイティブスピーカーによるインフォーマントチェックを受けたものである。

注

* 本稿は、文部省科学研究費補助金による研究（研究題目：「バルト語動詞のテンス・アスペクト・モード：スラヴ語との文法的比較対照研究」；平成13-15年）の成果の一部をなすものである。

- 1) バルト語派 Baltic languagesは、リトアニア語 (Lithuanian)、ラトヴィア語 (Latvian)、古プロシア語 (Old Prussian) に代表される、バルト海東沿岸部に分布する言語群である。現存するものは、系統的には東バルト語に分類されるリトアニア語とラトヴィア語の2つのみである。古プロシア語は、西バルト語では唯一文献を残した言語であるが、17世紀末に死滅している。それぞれの言語による古文獻は、最古のものでも16世紀と比較的新しいが、言語自体は印欧語の非常に古い特徴をよく保存している。
- 2) スラヴ語派 Slavic languagesは、バルト語と非常に近い関係にある印欧語族の主要な語派の1つであり、東、西、南の3つの言語群に分類される。現代のスラヴ語の文語として認められているのは、東スラヴ語のロシア語 (Russian)、ウクライナ語 (Ukrainian)、ベラルーシ語 (Belorussian)、西スラヴ語のポーランド語 (Polish)、上下ソルブ語 (Upper / Lower Sorbian)、チェコ語 (Czech)、スロヴァキア語 (Slovak)、南スラヴ語のブルガリア語 (Bulgarian)、マケドニア語 (Macedonian)、セルビア・クロアチア語 (Serbo-Croat)、スロヴェニア語 (Slovene) の12である。9世紀の聖書文獻の訳に始まるスラヴ語古文獻に記された、いわ

ゆる古代教会スラヴ語 (Old Church Slavic) は、南スラヴ語の方言的特徴をもつものの、スラヴ祖語に最も近い文法構造を示し、語派の発達に関して貴重な情報を提供する言語である。一般的に言えば、スラヴ語もまた保守的・古態的であり、全体的には屈折変化タイプが優勢である。

3) 印欧語研究においては「分詞」(participle) という用語は形容詞の形態をもつもののみを指すこともあるが、ここでは、これを形容詞的分詞のみならず副詞的な形態をもつものも包含する広義な術語として用いる。

4) 類型論的に見て、半述語的—状況語的機能は、分詞の機能の基礎をなすものである (König & Auwera 1990)。リトアニア語の半述語的機能にはさらにいわゆる説明的 (補語的) 機能があるが、状況語的機能に比べてはるかに稀にしか見られないので、本稿では考察の対象から外す。(説明的機能の例。Tėvas sakėsi gerai gyvenąs. 父は(自分は)よい暮らしをしている (現形分) と言った。Girdėjau tėvą gerai gyvenant. 父はよい暮らしをしている (現副分) と私は聞いた。)

本稿で用いる略号は以下の通りである：

pfv. = perfective、ipfv. = imperfective、動 = 動詞、形分 = 形容詞的分詞、副分 = 副詞的分詞、半分 = 半分詞、現 = 現在、過 = 過去 (一過 = 一般過去)、未 = 未来、能 = 能動態、受 = 受動態、短 = 短語尾、長 = 長語尾、男 = 男性、女 = 女性、単 = 単数、複 = 複数、1・2・3 = 1・2・3人称、主 = 主格、与 = 与格、対 = 対格、Eng. = 英語、Lith. = リトアニア語、Russ. = ロシア語。

5) リトアニア語の伝統文法では、be動詞と結びついた分析的 (迂言的) パーフェクト形は、専ら動詞の複合形式として扱われている。だが、Paulauskienė (1979) が指摘するように、この形式においてbe動詞と分詞は、たとえば英語やフランス語におけるように「完全な」複合化に至って

いないので、本稿ではこれを分詞の述語的機能として扱う。

6) ロシア語の一般的な過去形は、本来はbe動詞と結びついて複合テンスを形成していた過去能動分詞 (いわゆる*f*分詞) であったが、単なる過去形として再カテゴリー化され、現代語では完全に動詞のテンス体系に組み込まれている。

7) 本稿では詳しく論じる余裕をもたないが、Jokojama (1983) の指摘によれば、分詞構文と主文のテーマが同じ場合に、ロシア語の副詞的分詞も主語不一致用法をもつことがある。(例。Slušaja ego, u menja goreli ščjoki. 彼の話聞きながら (現副分)、私の頬はほてっていた。) また、ロシア語においても、リトアニア語と同様に、形容詞的分詞 (長語尾形) が状況語的に機能することがあるが、ロシア語文法では伝統的に「文の独立二次的成分」として扱われている。(例。Lith. Vilkas, gerai išpertas, nutraukęs uodegą pabėgo. Russ. Volk, sil'no pobityj, otorvav xvost, ubežal. オオカミは、ひどく殴られ (過受形分)、尻尾をひきちぎって、走り去った。)

8) たとえば、次のような例において、分詞はそのアスペクト的・テンスの意味を弱め、形容詞に近づいている：Lith. iškepta (kepta) žuvis, Russ. žarennaja ryba 焼いた魚 (過受形分)；Lith. sergantis žmogus, Russ. bolejuščij čelovek 病人でいる人 (現能形分)。

9) Dahl (1981) をはじめ一般アスペクト論において規定されているように、限界動詞は、限界をもともと含み、それに向かってゆく場面を表わす動詞、非限界動詞は、そのような限界を含まず、また必要としない場面を表わす動詞である。なお、telic : atelic という術語を動詞の本来の意味に従った分類に用い、文法的意味に従った分類では、bounded : nonbounded を用いる立場もある。ロシア語の用語 predel'nyj : nepredel'nyj は後者に近い。

- 10) ロシア語では、副詞的現在分詞を形成し得る完了体動詞は非常に限られている。たとえば、**pročtja**は**pročest'** (**pročitat'**と同じく「読む」を意味する完了体動詞)の副詞的現在分詞であるが、その意味・機能は過去分詞**pročitav**「読み終えて(から)」に等しく、両者は交換可能に用いられる。
- 11) 通時的には、バルト語の分詞体系の基礎をなしたのは、本来は、動作性activity(あるいは動作主体agentivity)の意味をもつ接尾辞*-nt-、および、結果性resultativityの意味をもつ接尾辞*-us-および*-to-をともなった動詞派生名詞であった。受動態の起源は、*-to-分詞の構文に現れ、*-mo-をもつ動詞派生形容詞が受動分詞に転化したのはより後のことである。スラヴ語には、結果性を意味する*-lo-、結果性・受動性を意味する*-no-がみとめられるので、古い時期からバルト語とスラヴ語の分詞体系は*-nt-と*-us-の間の対立を除けば形態的特徴において異なるが、類型論的には等しいものである。(Ambrazas 1990)
- 12) Jakobson (1957)、Maslov (1978)、Bondarko (1987)らはこのような事象間の時間順的な相互関係をタクシスtaxisと呼び、これと動詞アスペクトとの関係を重視している。
- 13) 例文に添えられた記号[?/?/*]は、それぞれ、「不自然/きわめて不自然/非文法的」というインフォーマントの判断を表す。
- 14) ロシア語の規範文法では不完了体動詞から形成された過去受動分詞は述語的機能をもたないことになっているが、口語では次のように言うことがある: *Eta kniga čitana mnoju mnogo raz.* この本は私によって何度も読まれている(過受形分・短)。
- 15) リトアニア語の限界動詞から形成された現在受動分詞**perskaitoma**は、「読み終わられる、読み終わることができる」という可能性を意味し、しばしば期間を表す状況語をとまう。(例. *knyga, perskaitoma per savaitę* 一週間で読み終わられ

る本)

- 16) リトアニア語の現在能動分詞は、be動詞と結びついて述語的機能をもつ際、常に接頭辞 *-be-*をとまう。

参考文献

- Ambrazas, V. 1990. *Sravnitel'nyj sintaksis pričastij baltijskix jazykov*. Vilnius: Mokslas.
- Bondarko, A. V. 1987. "Vvedenie. Osnovanija funkcional'noj grammatiki." In: *Teorija funkcional'noj grammatiki. Vvedenie. Aspectual'nost'. Vremennaja lokalizovannost'. Taksis*. Leningrad.
- Comrie, B. 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, B., G.G. Corbett (ed.) . 1993. *The Slavonic languages*. London / New York: Routledge.
- Dahl, Ö. 1981. On the definition of the telic-atelic (bounded-nonbounded) distinction. *Syntax and Semantics* 14: 79-90. New York: Academic Press.
- Dambriūnas, L. 1960. *Lietuvių kalbos veiksmoždzių aspektai*. Boston: Lietuvių enciklopedijos leidykla.
- Endzelin, J. 1971. *Comparative Phonology and Morphology of Baltic Languages* (trans. W.R. Schmalstieg and Benjamins Jegers) . The Hague/Paris: Mouton.
- Fennell, T.G., Gelsen, H. 1980. A Grammar of Modern Latvian. vol.1-3. The Hague/Paris: Mouton.
- Genušienė, E. Š., V. P. Nedjalkov. 1988. Resultative, passive, and perfect in Lithuanian. In: V. P. Nedjalkov (ed.) *Typology of resultative constructions*, 369-386.

- Hewson, J., V. Bubenik. 1997. *Tense and aspect in Indo-European languages (Theory, typology, diachrony)*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Jakobson, R. 1957. Shifters, verbal categories, and the Russian verb. In: *Selected writings* vol.2, 130-147. The Hague/Paris: Mouton.
- Jokojama, O. 1983. V zaščitu zapretnyx deepričastij. *American Contributions to the Ninth International Congress of Slavists*, vol.1, Linguistics: 373-81. Slavica: Columbus, OH.
- Kabelka, J. 1975. *Latvių kalba*. Vilnius: Mintis.
- König, E., J.Auwers. 1990. Adverbial participles, gerunds and absolute constructions in the languages of Europe. In: J. Bechert, G. Bernini and C. Buridant (eds.) *Toward a Typology of European languages*, 337-355. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Lietuvių kalbos gramatika*. vol.2. 1971. Vilnius: Mintis.
- Lithuanian grammar*. 1997. Vilnius: Baltos lankos.
- Maslov, Ju. S. 1978. K osnovanijam sopostavitel'noj aspektologii. In: *Voprosy sopostavitel'noj aspektologii*, 4-44. Leningrad.
- Mūsdienu Latviešu literārās valodas grammatika*. vol. 1. 1959. Rīgā: Latvijas PSR Zinātņu Akadēmijas izdevniecība.
- Musteikis, K. 1972. Sopostavitel'naja morfologija *russkogo i litovskogo jazykov*. Vilnius: Mintis.
- Paulauskienė, A. 1979. *Gramatinės lietuvių kalbos veiksmažodžio kategorijos*. Vilnius: Mokslas.
- Russkaja grammatika*, tom 1-2. 1979. Praha: Academia.
- Russkaja grammatika*, tom 1-2. 1980-82. Moskva: Nauka.
- 櫻井映子 (1997) 「リトアニア語のアスペクトと複合テンスに関する機能意味論的考察」『言語研究』112: 98-131. 日本言語学会.
- (1999) 「ロシア語とリトアニア語のアスペクト体系の比較対照——機能意味論的内容における類似と差異をめぐって——」『ロシア語ロシア文学研究』31: 82-97. 日本ロシア文学会.
- (2002) 「バルト語動詞の時間表現——スラヴ語との比較による特徴づけ——」、『人文』1: 55-72.
- (2003) 「リトアニア語とロシア語の過去分詞の状況語的 (半述語的) 機能——相対的時間表現と文の統語構造——」『ロシア語ロシア文学研究』35: 1-8.
- Schmalstieg, W.R. 1974. *An Old Prussian Grammar: The Phonology and Morphology of the three Catechisms*. The Pennsylvania State University Press.
- Senn, A. 1949. Verbal aspects in Germanic, Slavic, and Baltic. *Language* 25 (4): 402-409.
- Stang, Chr. S. 1942. *Das slavische und baltische verbum*. Oslo: Jacob Dybwid.